



第30回

時代の先へオーバーラップ

奥寺康彦

okudera yasuhiko

長谷部誠(フランクフルト)、内田篤人(シャルケ)、香川真司(ドルトムント)、岡崎慎司(マインツ)、大迫勇也(ケルン)……。

今でこそ日本代表クラスの選手が何人も所属し活躍しているドイツ・ブンデスリーガ。その日本人第1号となったのは、奥寺康彦氏だ。今から37年も前の1977年のことだった。

2012年8月、日本サッカー協会の殿堂入りを果たした奥寺さんに、今年11月、新たな勲章が加わった。新設されたアジア・サッカー連盟(AFC)の殿堂入りメンバー10人のうちの一人に選出されたのだ。日本からは他に澤穂希選手が選ばれている。

ドイツで“東洋のコンピューター”と呼ばれた奥寺さんに、ドイツに渡ることになったきっかけ、ブンデスリーガで体感したこと、帰国後、日本サッカーについて感じることなどについてお話を伺った。

聞き手/山本浩 文/山本尚子 構成・写真/フォート・キシモト 日本文化出版「奥寺康彦プロフェッショナルロード」より

サッカー文化醸成のために

—— 最近、お忙しいようですね。

何だかバタバタしています。横浜FC(株式会社横浜フリエスポーツクラブ)では取締役会長をしています。横浜FCが総合スポーツクラブを立ち上げたのでその代表理事ですとか、星槎学園高等部湘南校の名誉校長、その他いろいろ顧問や理事も務めています。

週末には、50~60歳代のシニアチームでサッカーしてますよ。

—— 左利きの俊足を飛ばしているわけですね。

まあ、大分落ちましたけど、それでも楽しくやっています。いずれの活動でも、サッカー文化、スポーツ文化を育て上げたいという思いがベースにあります。

—— 子ども達の体力不足が指摘されているでしょう。



FAクラブ活動(国立競技場さよならイベント)

子どもの指導にあたる機会もあるかと思いますが、危機感のようなものはありますか？

今ね、スポーツをやっている子どもを見ると、あまりに小さいうちから、サッカーならサッカーと早く専門化しすぎなのではと思うんですよ。言い方は悪いですが、偏った体になってしまう。けがもしやすくなる。僕らのころは缶蹴り、縄跳び、野球など、いろいろ遊びながら自然に“体幹”というものが鍛えられていったと思うんですね。ドイツでも、子どものころには練習をさせすぎず、ケガをしにくい体づくりを考えている。あんまり追い込まずに、バランスよくという視点が大切だと思いますね。

秋田から横浜へ転向して まさかの登校拒否？

—— 奥寺さん、お生まれは秋田県でしたね。
昔は鹿角郡かつのと言っていたのですが、秋田県鹿角市かつのの大湯温泉で生まれて、10歳まで住んでいました。冬はスキーをするのですが、僕は弱虫で高いところが嫌いなのでビビっていましたよ。

—— でも足は速かったのでしょうか？

いや、それほどでもなくてごく普通でしたね。僕は3月生まれなものだから、同学年の4月生まれの子どもに比べると体格や体力で差があったのではと思いますね。



小学1年のころ(秋田)

—— 秋田はどちらかというと野球が盛んなのでしょうか。山田久志投手とか?
そうですね。

—— ではそのままずっと秋田にいらしたら、サッカーの世界への入口は……。なかったでしょうね。向こうで親父の仕事がなくなってしまい、小学校4年生のとき、寮の管理人の仕事があった神奈川県横浜市に引っ越してきました。

—— 転校生ということで戸惑いや驚きはありましたか?

ありましたよ。大湯温泉は本当にのどかな田舎ですからね。最初、自分のズーズー弁が気になって自己紹介をするのも恥ずかしい。転校してきて1カ月も経たないころ、登校拒否になりました。

—— えっ?

たった1日だけですけどね。朝起きたくなくて。別に意地悪をされたわけでもなく、自信のなさが原因でした。でも友達ができてからは、全然平気でした。

最初は卓球部員

—— サッカーはいつごろからですか?

中学校(舞岡中学)からです。小学生のころは学校からいったん帰って、また学校の校庭に集まり、三角ベースや馬跳び、石蹴り、ゴム跳び、缶蹴り、ドッジボールなどをしていました。

中学に入学して、はじめは卓球部に入ったんですよ。寮に卓球台があって、大人相手に毎日やっていて上手かったの。



—— サッカー部に転部したのはなぜですか?

卓球台が2~3台しかなくて、1年生は毎日、基礎トレーニングばかりだったんです。素振り1000回に、今はやっちゃいけないウサギ跳びとランニングの繰り返しでつまらなかった。そんなとき野球部に入った友達に、「一緒にサッカー部に入ろう」と声をかけられて……。5月にはサッカー部員になっていました。

—— いろいろな偶然が重なっていたのですね。

中学2年でレギュラー獲得、ポジションは左サイドのFW

—— 舞岡中学のサッカー部は強かったのですか?

顧問の先生がおられて、そこそこ強かったですよ。各学年10人ずつぐらいいたかな。1年生は15人ぐらいいましたかね。まあサッカー部でも、最初はボール拾いです。サイドキックを教わり、ヘディングをして、またボール拾い。僕はトウキックでしか蹴れずインステップは難しかったですね。

—— よく続きましたね。

夏合宿がまたきついんですよ。先輩がやって来て余計に走らされますから。だから合宿が終わると、1年生は半分ぐらいに減っていたな。

—— 奥寺さんはなぜ辞めなかったのですか?

サッカーってボール磨きがあるんですよ。縫い目のところから切れないように丁寧に磨くんです。練習が終わったあと、みんなで車座になって、ボールを磨きながらいろいろな話をしましたよ。その時間が好きで、仲間意識が高まって、だから続けられたんだと思うな。

—— 1年生から華々しく活躍したわけではないのですか?

全然。ボールをきちんとインステップで蹴れるようになったのが1年の終わりごろ。そのころから足が速くなってきて、2年でレギュラーになりました。「おまえ、足が速いからフォワードやれ」と言われて。左サイドのフォワードです。

—— そのころのフォーメーションは、4-3-3が



中学時代、県大会で優勝

はやり始めたころでしょうか？

いや、まだWMフォーメーションでした。

頭を使って練習する

—— 高校サッカーが徐々に盛んになると、パス練習をさせる指導者が増えてきたと思うのですが、奥寺さんのところはいかがでしたか？

やっぱりシュート練習のほうが多かったですね。ただ中学3年のときの合宿に、メルボルンオリンピックに出場された三村恪一^{かくいち}さんが来られて、「頭を使う合宿をする」といって3対2の練習をやりました。

—— 3対2というと？

ペナルティーエリアの幅で、攻撃が3人でDFが2人。パスを3人でつなぎながら、スルーパスを通す練習なんです。

—— 指導者のほうも、戦術を学び工夫する時代になっていったのですね。奥寺さんは部活動以外で、何かサッカーを学ぶ材料になるものはあったのですか？

『サッカーマガジン』が創刊されたのが、中学3年のとき(1966年)だったですかね。それより前だと、中学2年のときにアジアユース大会が東京で開催されて、見に行った記憶がありますよ。

—— 自分のチームだけでなく、サッカー全体に関心を持ち始めていったのですね。

レギュラーになってからは、日本代表の試合に興味が湧いてきましたね。

—— 県の代表に選ばれたりしたことは？

なかったです。



高校時代、相模大附属高校
右が麻田義弘

左ウイング奥寺の誕生は ケガの功名

—— 高校は相模工大附属に進学されましたが、誘われたのですか。「舞岡中に俊足の奥寺あり」というのはかなり知られていたのでしょうか？

知られていたとは思いますが。僕は左右両方で蹴ることができたんですよ。とくに左より右が強かったです。ミドルシュートもかなり打ってました。先生に勧められて、同級生5人で相模工大附属に進学しました。僕らの上の代までは鎌倉学園に進んでいたんですけどね。

高校に進んでからは、右サイドにまわりました。ポジション的に言えばウインガーです。

—— 高校の練習はどうでした？

まあ、よく走りました。毎日、ダッシュ、ダッシュでした。

—— ケガとは無縁の選手生活でしたか？

高校2年の終わりごろだったか、右膝を大ケガしましてね。コーナーキックからのプレーで敵のゴールキーパーが僕の膝に乗るかたちになっちゃいました。筋肉疲労をとるスーッとするクリームがあるじゃないですか。冷やしちゃいけないのに、あれを塗っちゃったんですよ。翌日、膝が丸太ん棒のように腫れ上がっていて、1カ月ほど入院しました。練習に復帰しても最初はまだ痛くて右足では蹴れなくて、それで左が強くなりました。

—— ケガをしていなければ左ウイングでなく右ウイングだったかもしれないですね。

古河電工入りが決まる

—— 将来は実業団でサッカーをやろうという思いは、いつごろ芽生えたのでしょうか？

中学3年のときに僕らの指導をしてくださった三村さんが「〇〇は〇〇大学だな」「奥寺、おまえは古河(古河電気工業)だな」とおっしゃっていたのが、ずっと頭に残っていました。高校3年になって、インターハイ、国体が終わったころ、先生に「進路どうするんだ?」と聞かれて、思い切って三村さんに尋ねてみたら、「あ、忘れてた、すぐ連絡するから」と長沼健さんに電話をしてくれました。練習に参加して、試合で得点を決めたりして、次の日だったかに「採用する」と言われました。当時、川淵三郎さんがコーチでしたね。

—— ずいぶん即決だったのですね。全国高校サッカー選手権は出場されましたか？

当時は選抜だったんですよ。関東から2校。1校は南浦和高校。そして関東2位だった僕らが選ばれました。だから古河入りが決まったのはそのあとですね。

一時期、役者修業も

国体が終わったあと、僕は俳優になろうとしていた時期がありました。

—— は？

雑誌を見ていたら劇団員募集の記事があったので、はがきを出したら受かったんです。毎週末、夜に芝居の稽古

があるので、その日だけはサッカーの練習を早退していたら友達にあやまれて。「いや、実は……」って打ち明けたら、先生にしゃべっちゃったんですよ。

—— どうなりました？

それが三村さんの耳にも届き、「おまえ、ばかなことを考えているんじゃないぞ」と一喝され、2カ月ほどで辞めました。

—— 川淵さんも元演劇部の経歴の持ち主ですが、奥寺さんは役者にでもなりたかったのですか？

なんだろう。急に目標がなくなっちゃってエアポケットに入った感じだったんですよ。魔が差したというやつでしょう。

代表合宿で初めてのリフティング

—— 古河電工に行くこと決まって、周囲の反応はどうでしたか？

みんな喜んでくれました。選手権が終わった2月ごろ、卒業する直前にはアジアユース大会(1966年)のメンバーに選ばれました。

—— それが初めての代表ですか？

年代別ですが、初めてでした。

—— どんなメンバーがいましたか？

1年下に永井良和がいて、亡くなりましたが高田一美もいました。監督は八重樫茂生さんで、コーチは松田輝幸さんでした。

—— 初代表の雰囲気はどうでした？

練習の中でボールリフティングのメニューがあったんですよ。僕、やったことなくてね。

—— え、やったことがない？

なかったです。「タッチ際」「タッチ際」と言われるんですけど、ぼろぼろ落としちゃってね。少しずつできるようにはなりましたが、それでもなぜか登録メンバーに残りました。

—— 日の丸を胸にした気持ちはどうでしたか？



JSL(対読売クラブ)



JSL(対藤和不動産)

初めてだったのでとてもうれしくて浮き浮きしていました。フィリピンのマニラで大会があったんですが、海外に行くのも初めてでした。今思うと「前に進んでいるな」という意識もあったと思いますね。

—— あこがれの選手というのはどなたかいらしたのですか？

釜本邦茂さんです。点取り屋で、遠くからもドーンとシュートを打つダイナミックさが魅力的でしたね。

19歳で初のフル代表に選出

—— 古河ではお仕事もされていたのですか？

最初はしていました。あのころ、練習は週3日。火・木・金が練習日で、土曜が試合という感じでした。ユース大会が終わったころ、23歳以下の日本代表に招集されて、ハンガリーのブダペストで合宿があったんですよ。

—— それが初ヨーロッパですか？

そうです。10日間ほどでしたけど、日本ではやっていないシステムや戦術、練習法を教わってすごく楽しかったことを覚えています。そのあと今度、西



1977年 西ドイツとの掛け橋となった二宮寛(左)等と



1FCケルン時代(右はバイスバイラー監督)

ドイツに行って、ボルシア・メンヒェングラートバッハで練習試合をしたんですよ。そうしたら、そこにヘネス・バイスバイラー監督もおられて。

—— お、のちに奥寺さんを発掘したバイスバイラーさんですね。

そのときはまだそれがきっかけというわけではないんですけどね。でもそのころはまさに成長期でしたね。帰国してすぐ、19歳でフル代表に選ばれましたから。ヨーロッパからベンフィカ・リスボンが来日して対戦したんです。エウゼビオ選手の印象が強く残っています。みんなパスがうまくてヘディングが強くて、衝撃的でした。

僕は試合の後半、杉山隆一さんに代わって左サイドで出場したのが、代表デビューでした。何をやったか全然覚えていないんですけど。

ヘネス・バイスバイラー監督に1FCケルンに誘われる

—— そのころ、W杯出場というのは、奥寺さんの頭にあったのですか？

はい。でも1974年の西ドイツ大会の予選のころは、椎間板ヘルニアをやっちゃって代表に呼ばれず、悔しい思いをしました。

—— その後、日本代表の主力として活躍されている奥寺さんに、1977年夏、25歳で転機が訪れます。西ドイツの1FCケルンに移籍が決まったのはどのような経緯があったのですか？

日本代表の監督は二宮寛さんで、1978年のアルゼンチンW杯予選にすでに敗退していたんですよ。次の目標に向け、西ドイツで1977年6月から2カ月もの強化合宿をしました。途中、分散合宿の形式で選手はいろいろなプロチームに預けられたんです。僕はバイスバイラーが監督をしていた1FCケルンに行きました。

—— 奥寺さんのほかには？

キンタ(金田喜稔)、西野朗など僕も入れて6人いました。1週間、一軍の練習でもまれて、最後、僕だけバイスバイラーにロッカールームに呼び出されました。二宮さんが通訳をしてくれて「チームに來ないか」と。



釜本邦茂

—— 最初はお断りになったのでしょうか。
断ったというか、言葉もできないし、自信もないし、家族も子どももいましたから、「この場では結論は出せない」と伝えました。
それでいったん日本に戻ったのですが、9月19日だったか、バイスバイラーが直接、電話をよこして「左ウイングのレギュラーとして奥寺が必要」と言うんです。それでついに行く決心をしました。

—— 古河も円満に送り出してくれましたよね。
はい、10月3日がアマチュアとしての最後の日、プロ入り発表記者会見を行いました。

デビュー戦開始1分でPKを与える

「なぜ僕が？」の思いはずっとありましたけど、バイスバイラーに直接聞いたことはありません。僕かキンタかどちらかという選択だったようですよ。

—— ご家族も一緒に？
僕は10月5日に単身ドイツに行き、1カ月の間に住まいの準備をして家族を呼び寄せました。

—— いつデビューを飾るか、かなり注目されてましたね。
10月12日の試合後半から出場予定のはずが接戦になって、デビューを勝利で飾らせたかったらしく、延期になりました。10月15日のフランクフルト戦にずれたのですが、今度は右すねが腫れて発熱。ストレスだったんでしょうねえ。スタジアム、環境、トレーニング、お客さん……、何から何まで日本とはレベルが違いすぎて、語学学校に通いながら、慣れるのに精一杯でしたから。

—— さあ10月22日、満を持して、アウエイのデュイスブルグ戦。どうでした？
3万人の観客が入っていました。僕は右サイドのウイングでした。開始1分も経たないうちに、相手選手がペナルティエリアに斬り込んできて、ちょっとボールが大きくなったから足を出したら、倒すかたちになって……。

—— PKですか？
そうです。この間初めて映像を見たんですけど、PKを取られたのはしょうがないとしても、まんまと誘われた、やっちゃいけないPKでしたね。僕は必死で審判に「違う、違う」とやってみました。でもゴールキーパーのシューマッハーがPKを止めてくれたんですよ。ほっとして抱きつきに行きました。試合は2-1で勝ちました。

1年目から二冠に貢献

—— バイスバイラーさんの前職はケルン体育大学の教授で、「プロフェッサー」と呼ばれ敬愛されていたと同時に、若手選手の発掘に定評がありましたよね。奥寺さんがバイスバイラー監督のもと、ブンデスリーガで「やれるぞ」という感じになったのはどのあたりからですか？
1年目の後半から活躍できたし、優勝（リーグ戦とカップ戦の二冠）もしましたから「ああ、やれそうかな」という感じはありました。2年目からはレギュラーとして、相手との間合いもわかってきましたし。

—— UEFAチャンピオンズカップでも活躍がありました。
ドイツでは日々の練習でも、簡単な練習なんだけど1つひとつにより精度の高い正確性が求められるんです。

—— それは古河時代とは異なるものですか？
古河のときも意識してやっていたつもりでしたが、それ以上にもっとですね。あとは勝利への意識です。プロとしてのそれはやっぱり違いましたね。

—— 3年目のシーズンが終わり、バイスバイラーさんがアメリカのニューヨーク・コスモスに移籍したあと、1980年、奥寺さんはヘルタ・ベルリンに行かれました。



西ドイツで子供と



1FCケルン時代

新監督は考え方が違う人で、出場機会がなくなってきていたんです。

—— 日本に帰ろうかという気持ちにはならなかったですか？

一切なかったです。ドイツでなければオランダも、ベルギーもある。ヨーロッパのどこかでできると思いましたから。

—— 交渉は代理人が？ それともクラブが主導権を握ってですか？

いや、代理人制度はまだなかったですし、僕が自分で条件面などを交渉して決めました。

「左ウイングバック」という天職

—— 翌1981年シーズン、ヘルタから今度はヴェルダー・ブレーメンに移籍されました。

ブレーメンのオットー・レーハーゲル監督が、僕のヘルタでのプレーを見て「来い」と声をかけてくれました。ヘルタではボランチとかミッドフィルダーをやっていましたが、レーハーゲルは僕に「右サイドでディフェンスをしてくれ」と言うんです。「おまえはどこでゾーン・ディフェンスを習ったんだ？」と聞いてくるんですよ。「え？ 僕、習った記憶はないけど、なんとなく覚えました」って答えました。

—— ドイツは当時、マン・ツウ・マンが多かったのでしょうか？

そうそう。でも僕は相手についていけないものだから。で、「そのままゾーンでやってくれ。行けたら、どんどん上がっていいよ」って。

—— 今でいう「サイドバック」ですよ。80年代から3-5-2が流行りだして、それでいえばウイングバックでしょうか？

ががが上がるスピードと、案外守備も強かったんで、バランス的な役割で重宝がられたんだと思います。

—— 全体が広く見えていたわけですね。その間、日本代表とは無縁だったわけですが、W杯を目指したいとか呼んでほしいと思いませんか？

そういう動きもなかったし、あまり感じなかったかな。1986年のメキシコ大会予選となる日韓戦の



1982年 ジャパンカップ・日本代表対
ヴェルダー・ブレーメン(国立)

ときは打診があったんですよ。でもその前までは、W杯よりオリンピックへの思いが強かったからね。

—— プロになった時点で、オリンピックには出られないという思いは持っていたんですか？

はい、もう無理だと。

—— ドイツから、日本代表はどのように見えていたのでしょうか。

毎夏2週間は帰国していたんですよ。外から見てると、技術の高い選手は出ているんだけど、それは「個」のレベルに過ぎず、「チーム」になるとその力が発揮されない。それが日本代表の弱点だと思いましたね。

日本国内初の プロサッカー選手となる

—— 1986年6月、通算235試合出場、25得点の足跡を残し、9年間のブンデスリーガ生活に別れを告げ、奥寺さんは帰国されました。これを決意したのは？

レーハーゲルはあと1年いてもいいよって言ってくれたんだけど、もう若手も育ってきて、出場機会は減るのがわかっていましたからね。途中でコーチのライセンスを取っておけばよかったなと思いま



西ドイツでの活躍を伝える
現地のサッカー雑誌

たが、そんな時間もなかったし、まだできるうちに日本に帰って、おこがましいけど自分がやってきたことを見てもらいたいと決心しました。

—— 古河に戻られて、国内初のスペシャル・ライセンス・プレーヤー契約を結びましたね。プロサッカー選手登録制度の適用第1号が奥寺さん、第2号が日産自動車の木村和司さん。

はい、そこで初めてプロが認められ、2年後には読売クラブの選手を中心にプロ契約の選手は増えました。

—— 古河はアジアクラブ選手権で優勝。奥寺さんは日本代表に復帰されましたが、1988年シーズンを終えて現役引退されました。Jリーグ開幕の5年前ですが、そのころプロリーグの足音というのは聞こえていましたか？



全然。ちょうど日本サッカーリーグ（JSL）の総務主事に川淵さんが就任して、活性化委員会が組織されたころですよ。川淵さんは古河を辞め、プロ化に邁進するとおっしゃってました。少ししてプロリーグ構想をぶち上げて、「そうなのか」と

なったんですよ。5年というリミットをつけて、いよいよ本格的に動き出すんだなど。そこからは一気にだーっといきましたね。

GMとして迎えた Jリーグの開幕

—— 川淵さんが1960年にドイツのスポーツシュレ（学校）を訪れたときの風景が、Jリーグの理念の原点になっているというのは有名なエピソードですよ。1993年5月、Jリーグが開幕したとき、奥寺さんは？

古河電工を前身とする東日本JR古河サッカークラブ（現・ジェフユナイテッド千葉）のゼネラルマネージャー（GM）でした。監督は永井でした。

—— リティ（リトバルスキー）選手が来たり、充実のプロ化1年目という感じでしたか？

すごい人気で、選手たちもいよいよプロとしてやれるんだという喜びを感じていましたね。

—— プロチームの経営についてはいかがでしたか？

プロの世界を知っている人がだれもいなかったでしょう。社長でも、プロチームの経営は初めて。僕は経営の専門家ではありませんが、プロの世界のノウハウや経験を知っている限りお話ししました。

—— それから6年後の1999年2月5日、今度は横浜FCのGMに就任されましたね。

横浜フリューゲルスというクラブが事実上消滅して、サポーターの方たちが熱い気持ちでつくりあげたチームです。選手がいなかったんだから無鉄砲といえば無鉄砲ですが、ある外資系の代理店がスポンサーをすることになって、資金にMDがいたので十分できるよねということで、リティが監督をやることになり、信頼できるやつにそばにいてほしいということでGMをやってくれと頼まれました。

—— この間、紆余曲折はあったにせよ、今でも横浜FCに携わっておられる。

僕を必要としてくれる人がいる限り、やらなきゃいけないと思うタイプなんですよ。

新たな局面を迎えている 若年層の強化策

—— 奥寺さんは海外でプレーするという扉を開きましたが、今は海外でプレーする選手が本当に増えましたね。

日本サッカー協会の方針がよかったんだと思いますよ。U-12、U-15、U-18の年代別カテゴリーに分けて、地区トレセンからピラミッド方式で強化を進めるナショナルトレセン制度をつくったでしょう。若い年代のうちから国際試合を体験できる。発掘も育成もいい。だけどこの強化策も一定の成果が出たところで、現状は足踏みというか伸び止まり気味のように感じています。

—— U-20やU-17代表がアジアの壁を突破しきれない状況になっていますね。

うまい子はたくさんいるけど、ガンと当たられたと



永井良和

きにいかに耐えるのか。プレスが厳しくかかったときにどうするのかというようなトレーニングが足りないのかなとか。こちらから行けば相手が困るのになぜ行かないのか。やられちゃうから行かないのか、行かないからやられちゃうのか……。

—— ああ、ドイツなら練習のときから当たり前に行っている「ドイツの常識・日本の非常識」みたいなことでしょうか？

確かにそうなんですよね。

まずはスポーツ庁の設置を

—— 2011年にスポーツ基本法が成立し、2012年にはスポーツ基本計画が策定されましたが、どんな印象をお持ちですか？

スポーツ庁を早く創設してほしいですね。これだけスポーツが広く浸透してくると、プロのアスリート、オリンピック、学生スポーツ、クラブスポーツ、一般のスポーツ愛好者、スポーツ嫌いな人、いろいろいるわけです。子どもから大人までいかに人を育てていくかを考えると、スポーツに特化した省庁をつくらなければいけないと思うんですよね。

—— 2020年東京オリンピック・パラリンピックへの期待はいかがですか？

多くの人々にとっての目標になりますよね。あとはスポーツをやっている子どもたちにとっても、大きなモチベーションができました。ただ懸念もあります。オリンピック・パラリンピックというイベントでわーっと盛り上がり一つになったけれども、祭のあとすーっと波が引いていっただけに終わってはダメだなと。



FAクラブ活動(国立競技場さよならイベント)

—— 真のスポーツ文化は根づいているのか、ポスト2020年の課題ですね。

そこまで見据えて、選手の発掘・育成システムを含めたスポーツ環境を整備しておきたいですね。

プロスポーツ選手のセカンドキャリアと引退後の責任

—— 奥寺さんが中学1年でサッカーを始めてから、今年でちょうど50周年でしょう。サッカー選手を目指すお子さん、親御さんに向けて何か一言お願いします。

サッカーなどスポーツをすることは本当に素晴らしいことだと思うんです。生涯スポーツはなんらかのかたちで続けていってほしい。ただアスリートとして究極のところを目指したものの、夢がついてきたときの選択肢を持ってほしいですね。

ドイツの人たちはそこをいつも考えています。ユースの選手たちに聞いてみると、まずは「プロになりたい」という希望があるのですが、その一方で「僕、サッカーを辞めたら何になるんだよ」と言っていて、「銀行に入る勉強もしている」「電気屋さんになる勉強もしている」等々、ちゃんと準備ができています。

—— まさにセカンドキャリアにそなえているんですね。

だからこそ、海外ではプロ生活を引退したあとも、アスリート経験を活かして医師や弁護士として活躍するトップアスリートがたくさんいるんですね。

—— 広い視野と準備、日本はまだ足りないかもしれませんね。

プロ選手はある意味、あこがれの的です。だからそれなりの責任感も持たねばなりません。引退後も活躍を続けるそういう人材が日本からもっとたくさん出てくると、やっぱりスポーツの力ってすごいんだと再確認してもらえますよね。

—— ドイツ事情をよく知る奥寺さんだからこそその重みがある言葉ですね。どうもありがとうございます。



横浜FC サポーター



三浦知良(横浜FC)



香川真司(ドルトムント)

1904
明治37

国際サッカー連盟(FIFA)設立

1908
明治41

ロンドンオリンピックでサッカーが正式種目となる

1921
大正10

大日本蹴球協会創立

1929
昭和4

大日本蹴球協会、
国際サッカー連盟(FIFA)に加盟

1931
昭和6

大日本蹴球協会、旗章「3本足の鳥」を制定

1945 第二次世界大戦が終戦

1947 日本国憲法が施行

1950
昭和25

日本蹴球協会、
国際サッカー連盟(FIFA)に再加盟

1950 朝鮮戦争が勃発

1951 安全保障条約を締結

1952 奥寺康彦氏、秋田県に生まれる

1954
昭和29

日本代表、FIFAワールドカップ(スイス大会)の
地域予選に初出
アジアサッカー連盟(AFC)創設
日本蹴球協会、
アジアサッカー連盟(AFC)に加盟
ヨーロッパサッカー連盟(UEFA)設立

1955
昭和30

欧州チャンピオンズカップ
(現、欧州チャンピオンズリーグ)がスタート
1955 日本の高度経済成長の開始

1958
昭和33

市田左右一常務理事(当時)、日本人初の
FIFA理事に就任

1964
昭和39

日本代表、東京オリンピック出場
アルゼンチンに勝利し、ベスト8進出
1964 東海道新幹線が開業

1965
昭和40

実業団8チームが参加し、
日本サッカーリーグ(JSL)が開幕

1968
昭和43

日本代表、メキシコオリンピック出場
3位決定戦で地元メキシコに勝利し、銅メダル獲得
FIFAが新設した「FIFAフェアプレー賞」を受賞

1969
昭和44

メキシコオリンピック日本代表、
ユネスコの「1968年度 フェアプレー賞」を受賞
1969 アポロ11号が人類初の月面有人着陸

1974
昭和49

1970 奥寺康彦氏、
古河電気工業サッカー部に入部

1973 オイルショックが始まる

日本蹴球協会、財団法人化し、
(財)日本サッカー協会(JFA)に改称

1976 ロッキード事件が表面化

1977 奥寺康彦氏、旧西ドイツの名門チーム
1FCケルンから日本人初の
プロサッカー選手としてデビュー
奥寺康彦氏、ドイツカップ準々決勝の
シュヴァルツヴァイス・エッセン戦で
初ゴールを記録

1978 奥寺康彦氏、ブンデスリーガではカイザー
スラウテルン戦で初ゴールを記録

1978 日中平和友好条約を調印

1979
昭和54

FIFAワールドユース・トーナメント
(現、FIFA U-20 ワールドカップ)、日本にて開催
アルゼンチンが優勝し、ディエゴ・マラドーナが
MVPに輝く

1980
昭和55

全日本女子サッカー選手権大会がスタート
1980 奥寺康彦氏、ブンデスリーガ2部所属の
ヘルタ・ベルリンへ移籍

1981
昭和56

第1回トヨタ ヨーロッパ/サウスアメリカカップ
(通称、トヨタカップ)開催
日本女子代表チームを初めて編成し、
第4回アジア女子選手権
(現、AFC女子アジアカップ)(香港)に出場
1981 奥寺康彦氏、ブンデスリーガ1部所属の
ヴェルダー・ブレーメンへ移籍

1982 東北、上越新幹線が開業

1986 奥寺康彦氏、帰国し古河電工とプロ契約、
日本国内最初のプロサッカー選手となる
奥寺康彦氏、古河電工の一員として
アジアクラブ選手権優勝

1988 奥寺康彦氏、引退

1989
平成元

日本女子サッカーリーグ(現、なでしこリーグ)が開幕

1991
平成3

日本女子代表、第1回FIFA女子ワールドカップ
(中国)出場
社団法人日本プロサッカーリーグ設立
川淵三郎氏、初代チェアマンに就任
プロサッカーリーグ正式リーグ名称「Jリーグ」を発表
1991 奥寺康彦氏、東日本JR古河FC
(現、ジェフユナイテッド市原・千葉)の
ゼネラルマネージャーに就任

- 1992
平成4 第10回AFCアジアカップ、広島にて開催
日本代表、決勝でサウジアラビアに勝利し、
アジア初制覇
- 1993
平成5 日本初のプロサッカーリーグ「Jリーグ」スタート
- 1995
平成7 日本女子代表、第2回FIFA女子ワールドカップ
(スウェーデン)に出場し、ベスト8進出
1995 阪神・淡路大震災が発生
- 1996
平成8 女子サッカー、アトランタオリンピックから
正式種目となる
日本、アトランタオリンピックに男女共に出場
日本男子代表がブラジルを下し、
「マイアミの奇跡」として歴史に刻まれる
1996 奥寺康彦氏、ジェフユナイテッド市原
(現、ジェフユナイテッド市原・千葉)の
監督に就任
- 1997
平成9 日本代表、イランとのアジア地区第3代表決定戦
(プレーオフ)を制して、初のFIFAワールドカップ
出場を決定
1997 香港が中国に返還される
- 1998
平成10 日本代表、第16回FIFAワールドカップ
(フランス)に出場
- 1999
平成11 U-20日本代表、FIFAワールドユース選手権
(ナイジェリア)に出場し、準優勝を果たす
日本女子代表、第3回FIFA女子ワールドカップ
(アメリカ)出場
1999 奥寺康彦氏、この年に設立されたチーム、
横浜FCのゼネラルマネージャーに就任
- 2000
平成12 日本代表、第12回AFCアジアカップ
(レバノン)に出場し、2度目の優勝を果たす
2000 奥寺康彦氏、この年から横浜FC
代表取締役社長も兼任
- 2001
平成13 日本代表、FIFAコンフェデレーションズカップ
(日韓共同開催)準優勝
- 2002
平成14 第17回FIFAワールドカップ、
日韓共同開催となり、日本はベスト16進出
世界が“笑顔のワールドカップ”と賞賛
第17回FIFAワールドカップを成功させたとして、
日本と韓国に「FIFAフェアプレー賞」が授与される
2002 奥寺康彦氏、ワールドカップ・
横浜開催準備委員を務める
- 2003
平成15 日本女子代表、第4回FIFAワールドカップ
(アメリカ)出場

- 2004
平成16 日本代表、第13回AFCアジアカップ(中国)に
出場し、2大会連続、3度目の優勝を果たす
- 2005
平成17 日本サッカーの発展に尽力した功労者を称える、
「日本サッカー殿堂」創設
- 2006
平成18 日本代表、第18回FIFAワールドカップ(ドイツ)出場
- 2007
平成19 日本女子代表、第5回FIFA女子ワールドカップ
(中国)出場
- 2008
平成20 U-23日本代表、なでしこジャパン
(日本女子代表)ともに北京オリンピックに
出場し、なでしこジャパンが4位となる
2008 リーマンショックが起こる
- 2010
平成22 U-17日本女子代表、FIFA U-17女子
ワールドカップ(トリニダード・トバコ)に出場し、
準優勝を果たす
U-21日本代表、なでしこジャパン
(日本女子代表)ともに、第16回アジア競技大会
(中国・広州)にて、初優勝を飾る
日本代表、第19回FIFAワールドカップ
(南アフリカ共和国)に出場
- 2011
平成23 日本代表、第15回AFCアジアカップ(カタール)
に出場し、大会最多の4度目の優勝を果たす
なでしこジャパン(日本女子代表)、第6回FIFA
女子ワールドカップ(ドイツ)にて、初優勝を飾り、
「FIFAフェアプレー賞」受賞
なでしこジャパン(日本女子代表)が団体として
初めて国民栄誉賞を受賞
2011 東日本大震災が発生
- 2012
平成24 なでしこジャパン(日本女子代表)、
ロンドンオリンピックにて銀メダル獲得
2012 奥寺康彦氏、第9回日本サッカー
殿堂入りを果たす
- 2014
平成26 なでしこジャパン(日本女子代表)、
第18回AFC女子アジアカップ(ベトナム)に
出場し、初優勝を飾る
日本代表、第20回FIFAワールドカップ
(ブラジル)に出場
2014 奥寺康彦氏、
アジアサッカー連盟(AFC)が新設した、
AFC初代殿堂入りを果たす



小学1年のころ(秋田)



JSL(対読売クラブ)



西ドイツで子供と



中学時代、県大会で優勝



1977年 西ドイツとの掛け橋となった二宮寛氏(左)等と



西ドイツでの活躍を伝える現地のサッカー雑誌



高校時代、相工大附属高校、右が麻田義弘



1FCケルン時代(右はバイスバイラー監督)



1FCケルン時代



JSL(対藤和不動産)



1FCケルン時代



釜本邦茂



ジャパンカップ・シンガポール
対ヴェルダー・ブレーメン(西が丘)



1982年 ジャパンカップ・日本代表対ヴェルダー・ブレーメン(国立)



横浜FC サポーター



永井良和



FAクラブ活動(国立競技場さよならイベント)



三浦知良(横浜FC)



FAクラブ活動(国立競技場さよならイベント)



香川真司(ドルトムント)



奥寺康彦

